

「好きな人の特別な存在になる」ことの特別さ¹

——相互的な愛の価値について——

村山 達也 (東北大学)²

What is special in being special to someone we love: The value of mutual love

Tatsuya Murayama (*Tohoku University*)

(2020年11月29日受稿, 2020年12月29日受理)

Although being loved by someone we love is generally acknowledged as having special value, what that value is and from whence it derives remain unclear. As described herein, the author suggests two constituents of the special value of mutual love: the very nature of love, i.e., becoming happy by the happiness of one's beloved; and a mutual recognition between lovers of this becoming happy by the happiness of one another.

After posing the question of the value of mutual love, the love-emotion relation is examined and defined in terms of relevant emotions. From this definition, the author examines a Union View of Love, inferring that this view clarifies neither the specificity nor origin of the value of mutual love. Finally, the author proposes the Echo View, explaining mutual love's value by the nature of love and by lovers' mutual recognition of their happiness, with some additional remarks about relevant issues.

Key words: love, emotion view of love, union view of love, valence, happiness

自分が愛している人から愛されることは、愛していない人から愛されるのとは異なった、特別な価値(よさ)をもつ。このことは、恋愛はもとより、家族の愛や、友人への親愛の情についても、広く認められていよう³。だが、相互的な愛が備えているこの特別さは具体的にはいかなるものであり、何に由来するのかを説明することは、一見そう思われるほど簡単ではない。

愛されることで、自分は愛されるだけの価値をもつ

Correspondence concerning this article should be sent to: Tatsuya Murayama, Department of Ethics, Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University, 27-1, Kawauchi, Aoba-ku, Sendai, 980-8576, Japan (e-mail: murayama110@tohoku.ac.jp)

¹ 本研究はJSPS科研費17H02259ならびに20H01175の助成によるものである。

² 本稿を作成する過程で、天野恵美理、神山薫、木下頌子、國領佳樹、杉山直樹、鈴木生郎、原健一、綿引周の諸氏、ならびに二名の審査者から、多くの有益なコメントをいただくことができた。記して感謝したい。

³ 恋愛、家族愛、友人への親愛の情をまとめて扱うことの妥当性については第二節で論じる。また、相互的な愛が特別な価値をもつことは、第三節で、いくつかの論拠を挙げてあらためて確認する。

と感じることができるからだ、と思われるかもしれない⁴。だが、この理由では、自分が愛している人から愛されることと、愛していない人から愛されることとの違いを説明できない。愛される価値があると感じるだけならば、自分が愛していない人から愛されることによっても可能だからである。

ここで、いま想定したように、ある人が、愛されることで、「私は愛されるだけの価値をもっている」と感じるようになったとしよう。そのときこの人は、少なくとも暗黙のうちに、愛するとは、相手に何らかの価値を認めることだ、と考えているはずである。だからこそ、愛されたとき、相手から何らかの価値を認められたと感じるわけである。

すると、この考えを基にして次のように推論できる

⁴ 念のためにつけ加えておけば、この一文での「価値」は、愛されている人がもつ価値(よさ)のことであって、愛されることももつ価値(よさ)のことではない。これ以降も、愛されている人のもつ価値と、愛されていることのもつ価値とは、どちらも登場するが、本稿のメインの主題はもちろん後者である。

と思われるかもしれない。自分が愛している人というのは、自分が何らかの価値を認めた人である。さて、そうなると、その人から愛されることは、自分が価値を認めた、まさにその相手から価値を認められることである。このことは、相手からの価値評価を正しいものと思わせ、その価値評価自体の価値を高める効果をもつ。これこそ、愛が相互的になることの特別さの由来なのだ、というわけである。

だがこの推論は間違っている。愛するとは、相手に何らかの価値を認めることだ、というのが正しいでしょう。そうだとすると、そこで認められる価値は、話が合う、勇気がある、好みの顔である、など、さまざまでありうるのであって、必ずしも「人を見る目がある」というものではない。だとしたら、愛している人から愛されたからといって、そのことは、「人を見る目があると私が認めた人から価値を認められた」ということを含意しないのである。

もちろん、相互的な愛の特別さを感じている人は、上記のような間違った推論をしており、その結果として特別さを感じているのだ、という可能性はある。だが、自分の愛している人が、自分から見ると趣味が悪い人であったり、ダメな人としか付き合っただけの人であったりしても、その人を愛しているのであれば、その人から愛されることは特別な価値をもつだろう。そうだとすれば、上記の推論は、間違っているだけでなく、実情を写しとることさえできていないのである。

ここで一つ注記しておきたい。いま私が棄却したような仕方——例えば「憧れの人から愛されることで、自尊心が高まって嬉しい」といった仕方——で、相互的な愛が当事者にとって価値をもつことは、もちろんありうる。そのことを否定するつもりは私にはない。いま私が求めているのは、相互的な愛がもつ価値の特別さを説明できるだけでなく、相互的な愛であれば必ず伴っていると言うこともできる、そうした要素であり、上記の要素はそうではない、というだけのことである。

さて、自分の価値を感じるができるという説明の同工異曲として、自分のかけがえのなさを感じるができる、というのもありえよう⁵。だが、自分が愛している相手からではなく、さらには、愛を向けられるのでさえなく、例えば、誰かから親の仇として狙われることによって、かけがえのなさを獲得すること

とはできる。その誰かの恨みは、他ならぬ私を殺すことによってしか晴らしえないものだからである。その点で、この理由は、相互的な愛がもつ価値の特別さを説明できていない。

相思相愛だと分かることで、遠慮なく、楽しく一緒にいられるようになるのであり、これこそ、愛の相互性もつ特別な価値である、という説明もありうるだろう。恋愛だけを例にとるならば、この説明は確かにもっともらしい。だが、離れて暮らす家族や、滅多に会わない友人などを考えると、もっともらしさは減じる。もはや一緒にいても気づまりなことのほうが多いが、お互いを大事に思い合っはいる、という関係もありうるのである。

ここまで来ると、相思相愛になることは端的によいことだからだ、とか、愛している相手から愛されたいという欲求は強いものだからだ、といった説明で済ませてしまいたくもなる。だがもちろん、これらは説明になっていない。いま説明すべきなのは、相思相愛はなぜよいことであり、その状態への欲求はなぜ強いのか、ということだからである。

確かに、相互的な愛が備えているよさは、分析して説明することのできないもの、よいということを受け入れるしかないものであり、その意味で、端的によいものなのだ、という可能性はある。しかし私は、愛しているという状態そのものがもつ性質によって、相互的な愛がもつ特別な価値を、いわば還元的に説明できると考えている。これから私が試みるのも、そうした説明に他ならない。

1. 準備的考察：用語の導入と、考察範囲の限定

本論に入る前に、いくつかの準備作業を行なっておきたい。

まずは、いささか不格好だが、二つの用語を導入しておく。本稿では、記述を簡潔にしたいとき、愛している側を「能愛者」、愛されている側を「所愛者」と呼ぶ。日本語の「愛するもの」は、能動と受動とのどちらをも指すことができ⁶、特別な用語なしにこの曖昧さを避けようとする、「愛しているという状態にある側のもの」といった煩雑な表現になってしまいがちだからである。

次に、本稿で「愛」と呼ばれるものの範囲を、ある程度まで明確にしておこう。愛は、特定の個人から、動物、集団（愛校心、人類愛など）、伝統、知識、キャベツまで、さまざまなものを対象としうる⁷。ただし本稿の目的は、愛が相互的になること——所愛者から能愛者へも愛が向かうこと——の価値の解明である。

⁶ なお、この曖昧さは、日本語のみならず他の言語でも生じる（英語の 'lover'、仏語の 'amant' など）。

⁷ 人類愛とキャベツ愛は、一つの生物種を対象とする点では似ているが、促してくる行動の点で、大抵の場合は大きく異なっている。

それゆえ、以下では、所愛者の側も愛する能力をもっていることが明らかな愛、すなわち、特定の個人へ向かう愛に、考察の範囲を限定する。具体的には、恋愛、家族の愛、友人への親愛の情である。ただし、適宜変更を加えれば集団への愛にも転用できるような議論を目指している。実際、愛国者は、他国から勲章を授与されるより、自国から勲章を授与されるほうに、いっそうの価値を見出すだろう。

さて、いま行った範囲設定は、その妥当性にいささかの疑念を抱かせるものかもしれない。恋愛と、家族の愛と、友人への親愛の情は、どれも「愛」と呼ばれるかもしれないが、そこには名目上の共通性しかないのではないかと。とりわけ最後のものは、要するに友情のことであって、それを「愛」と呼ぶ用法は、やや生硬だし、舶来もの（「友愛」）の匂いもする。それに加えて、集団への愛にも拡張できるような仕方でも議論を展開したいとまで主張するとすると、これはもう牽強附会の誹りを免れないのではないかと。

この疑念は至極もつともなものであり、これに答えることが次節の仕事になる。次節では、迂回路に見えるかもしれないが、まずは愛と情動との関係を考察する。なお、その際には、「愛」という語で、恋愛と家族愛とを典型例として念頭に置く。日本語における、特定の個人に向かう愛の代表例だからである。次に、その考察を踏まえて、愛を情動との関係のもとに定義する。最後に、その特徴づけをつうじて、考察範囲について本節で行なった限定を正当化しておきたい。

2. 愛の定義：情動との関係における

現代の日本語は、愛と情動とのあいだに何かしらの密接な関係があることを強く示唆している。「愛情」という言葉はその単純かつ如実な例である。他にも、例えば、山守義雄が「わしは昌三を愛している」と言っているのに、昌三によいことが起こってもいっさい喜ばず、悪いことが起こってもいかなる痛痒も感じないとしよう。そのとき私たちは、そういう態度は能愛者の取る態度ではない、と言いたくなるだろう。山守義雄は、嘘を言っているか、「愛している」という言葉の使いかたを間違っているかのどちらかだ、と考えざるをえないのである⁸。

愛と情動との関係についてのこの示唆を受け入れた

うえで、この関係についてももう少し立ち入って考えてみよう。愛は、情動であることで尽きているのだろうか。また、愛が情動だと言われるとき、その情動は具体的にはどのようなものなのだろうか。

いまここで情動とは何かを詳細に考察する余裕はないが、最低限の整理はしておく必要があるだろう。本稿では、情動とは、ある対象を、何らかの価値を備えたものとして表象する心的状態であり、その価値に応じた一定の感じを不可欠の構成要素とする、としておく⁹。例えば、いわゆる恐れとは、暗がりに潜む何かを、危険で避けるべきものとして表象する心的状態であり、体がこわばる感じを本質的に伴っている。いわゆる喜びとは、検査報告書に書かれた「陰性」という語を、望んでいた情報をもたらすよいものとして私に提示する心的状態であり、相好が崩れ全身が浮き立つような感じを伴っている。

さて、上記に基づくならば、愛とは情動だ、と断言してすますことはできないことになる。もちろん、誰かを愛しているときには、その人に何らかの価値を見出しているだろうし¹⁰、そのことによって、その人に起こるよいことや悪いことも、能愛者に対して、一定の価値を帯びたものとして現れてくる。だから、誰かを愛するとき、私たちは、その人に対してのみならず、その人に起こるよいことや悪いことに対しても情動を抱くようになる。そのことは確かであろう。

だが、情動についての上記の整理は、出現している情動、すなわち、現に感じられている情動についてのものである。私たちは、能愛者であるとき、所愛者を対象とする情動をつねに感じているわけではない。「私のパートナーは、私と一緒にいるときは私を愛しているが、仕事に没頭しているときや寝ているときは私を愛していない」という発言は奇妙に響く。愛は、睡眠や他のことへの集中によって中断されうるような状態ではない、と一般には考えられているからである。

というわけで、愛と情動との関係を、いったん次のように押さえておこう。すなわち、愛は、愛に特徴的な情動への傾向性——「～のときには、愛に特徴的な……という情動を抱く」という性質——を、少なくとも不可欠な部分としている。

なお、愛は、情動への傾向性のみならず、能愛者に特徴的な思考パターンや行動パターンなども構成要素

⁸ 現代日本語ではそもそも「愛」や「愛する」という語をあまり使わないのではないかと、と思われるかもしれない。一面ではそのとおりで、とりわけ、動詞形を口語で使うことはほとんどないだろう。他方で、「もう愛（情）はない」とか「まだ夫／妻を愛しています」といった言い回しはそれなりに自然に響く。そして、そうした用法をもとに考えても、本文での私の主張は裏づけられよう。なお、これ以降、映画の登場人物や実在の人物から借りた名前をたびたび用いるが、状況や台詞はすべて私の創作であるため、出典などは特に記載しない。

⁹ Deonna & Teroni (2012) や遠藤 (2013)、八重樫 (2016) などを参考にした。ただし、本稿の趣旨に応じた、それに必要な範囲での特徴づけであり、どれかに専一に従うということはない。

¹⁰ 正確には、「道具的価値（他の何かのために役立つという意味での価値）ではなく、究極的価値（それ自体がよいものであるという意味での価値）を見出している」と書くべきであろうが、煩雑さを避けてここでは省略した。

として含んでいよう¹¹。しかしいまは、話を複雑にしすぎないよう、そうした要素はいったん措き、愛と情動との関係に考察範囲を絞ることにする。

さて、次に考えるべきは、先述した「愛に特徴的な情動」である。これは、もう少し具体的にはどのようなものなのだろうか。その中身をどう考えるかについては、大きく分けて二つの候補がある (cf. Helm, 2017, §5)。

一つは、能愛者だけが抱くことのできる、愛に固有の情動が存在する、という考えである。実際、日本語には、そうした情動を指す言葉として「愛情」や「愛しさ」といった単語が存在しており、このことは、こうした情動が存在することを示唆するものではあるだろう¹²。

もう一つは、愛の固有性を、一つの情動ではなく、情動の出現パターンのうちに見る考えである。能愛者は、例えば、所愛者を見ると喜び、離れるときには淋しくなり、所愛者によいことが起きたら嬉しくなり、嫌なことが起きたら悲しくなり、所愛者に嫌なことをしてきた人に憤る。喜び、淋しさ、嬉しさ、悲しさ、憤りなどの情動は、個々別々に見れば、能愛者でなくとも抱くことができる。しかし、上記のような出現パターンは、能愛者に固有のものであって、このパターンにこそ愛の特徴がある、というわけである。

この二つは排他的な主張ではなく、両方とも認めても不整合は生じない。私としてはどちらも受け入れたところであり、後者の考えは、本節の冒頭で提示した山守義雄と昌三の例も示唆するところではある。だが、あいにく、前者のほうについて論拠を示す準備がない (この点については注12を参照されたい)。そこで、以下の議論では、より穏当な後者のほうだけを採用しておくことにする。すなわち、誰かを愛するとは、特徴的なパターンで出現するさまざまな情動への傾向性を身につけることである。もう少し具体的に言えば、所愛者によいことが起きたと思ったときには、正の感情価 (快) を伴う情動を抱き、悪いことが起きたと思ったときには、負の感情価 (不快) を伴う情動を抱くことである。キャッチフレーズでまとめるならば、誰かを愛するとは、その人の幸福で幸福になり、その人の不幸で不幸になることである¹³。

そして、この定義をもとに考えるならば、恋愛と、家族愛と、友人への親愛の情とを、「愛」という語で一つにまとめること、さらには、集団を対象とする愛への拡張も見据えることは、それほど奇妙ではなくな

るだろう。

実際のところ、「愛」と呼ばれる現象は極めて多種多様であり、それゆえ愛は、自然種なのかどうかをとりわけ強く疑われてきた¹⁴。「恋愛は十二世紀にフランスで発明された」とか、「そののちに明治期の日本に輸入された」といった説は、愛が自然種ではなく文化的な構築物であることを主張する代表例であろう。そうした極端な主張までいかずとも、「愛」という語の多様な用法を見るにつけ (注7を参照)、情動に関して私たちの言語が示している分類を、実在に正確に対応しているものとして無批判に受け入れてしまうのは、やはり素朴と言わざるをえない。ダンジガーやバレットのような構成主義的立場からの批判は、それとして真剣に受け止められるべきである¹⁵。

しかし他方で、同じく「愛」と呼ばれているからには、何がしかの共通性を備えているのではないかと考えることもできる。とりわけ、恋愛、家族愛、そして友人への親愛の情は、いずれも特定の個人を尊重することへ向かうものである。そうである以上、それらは、一つの類としてまとめることを許す共通の特徴を何かしら備えていると考えることができる。そこで本節では、その共通の特徴を捉えるべく、愛を、関連する情動の出現パターンとして、いわば約定的に定義したのである。

愛のような複雑な現象を、最初から完全に定義しようとしたり、完全に自然種であるか完全に構築物であるかのどちらかだといった二者択一に押し込んだりすることは、おそらくあまり得策ではない。大まかな定義と、それに基づく分析とを繰り返すことで、少しずつ理解を精細にしていこうと試みるほうが、この現象が備える複雑さにより適しているはずである。そして本稿も、そうした試みの一環に他ならない。

3. 「相互的な愛は特別な価値をもつ」

それでは本題に入ろう。本稿の冒頭では、相互的な愛が特別な価値をもつことは、ほぼ自明のこととして特に検討はしなかった。慎重を期して、ここで、そう主張できる理由をいったん確認しておきたい。

¹³ 情動という観点からは、「その人が嬉しくなれば嬉しくなり、悲しくなれば悲しくなることだ」とまとめたほうがよかったかもしれない。だがそれだと、愛するとは、相手と情動を一致させることだ、という誤解を招く恐れがあるので、本文でのような表現にした。実際、所愛者が悲しんでいるときに、「いまここで悲しみを抱けるのはよいことだ」と考えて嬉しくなる、ということはある。

¹⁴ Cf. 「フェールとラッセル [...] が、調査協力者に、短時間に思いつくだけの情動をリストアップさせた研究によれば、愛情 [...] は [...] きわめてポピュラーな情動であったが、それを基本情動と見做す論者は実のところ、殆どいないと言っても過言ではないようである」(遠藤, 2013, p. 218)。

¹⁵ Cf. Danziger (1997); Barrett (2017)。バレットの立場の簡便な紹介として大平、木村、白井、藤原 (2017) がある。

¹¹ 近年、愛をそうした複合的な「症候群 (syndrome)」として定義する考えが提唱されている (de Sousa, 2015, pp. 3-4; Pismenny and Prinz, 2017, §5)。

¹² こうした情動の存在を認める立場に対しては、この情動の形式的対象を確定するのが難しいという批判がある。形式的対象とは、情動の志向的对象が備えている一般的性質で、情動の原因となり、その情動を抱いたことの正当化に用いるものを指す。

論拠として私が思いつくのは三つである。第一に、日常的な言葉遣いのレベルで言えば、「好きな人の特別な存在になりたい」という言い回しや、愛が相互的になることを指す「恋愛の成就」という慣用語は、まさにこの特別さを言い表そうとしたものと考えられることができる。特別な人の特別な存在になることは特別なことであり、「特別な人の特別な存在になる」という到達目標は、恋愛それ自体のうちにビルトインされている。こうしたことを、人口に膾炙したこれらのフレーズは主張しているわけである。

第二に、古今東西の詩や小説、映画などは、愛している人から愛されるようになること（得恋）の素晴らしさや、愛が相互的でなくなること（別離、失恋）のつらさの表現に溢れている。別離とは、愛が相互的であることの価値を消失させる出来事であって、相互的な愛がもつ価値の特別さを、否定的な仕方でも示しているのである（ただし、別離や失恋のつらさには、他にもさまざまな要素が関係していると思われる。この点については本稿の最後に触れる）。

上記二つは恋愛だけに関わる論拠だが、次の第三の論拠は、親子の愛や、友人への愛（親愛の情）にも当て嵌まる。いま、ヨニが、自分の愛していると思っていた相手であるハニョルから愛されていることを知ったが、そのことを嬉しくも何とも思わなかったとしよう。そのときヨニは、自分は本当にこの人を愛していたのだろうか、と自問せざるをえないだろう。また、クララが、「自分が愛しているロベルトと、愛していないヨハネスとの、どちらから愛されようと、特に違いを感じない」と本心から答えていたとしよう。この発言を前にしたら、やはり私たちは、この人は「愛」という言葉の使いかたを知らない、と判断せざるをえないだろう。

このように、恋愛であれ、家族愛であれ、友人への親愛の情であれ、愛することは、所愛者から愛されるのをよいとみなすこと、さらには、それは他の誰かから愛されるよりもよいことだとみなすことを、含意しているように思われるのである。

4. 合一説の検討

近年、愛の哲学については多くの論文が出版され、入門書やハンドブックも出版が相継いでいる。その背景には、情動への関心の高まりや、2000年前後に重要な研究が立て続けに出版されたことがある¹⁶。だが意外なことに、本稿の問い——すなわち、「愛している対象から愛されることは、どのような点で特別であ

り、その特別さは何に由来するのか」という問い——を正面から論じた研究はほとんどない。それゆえ、本節では、愛についての代表的な説の一つを取り上げ、その説に、いわば斜交いからアプローチしていくことにする。

愛が相互的になることは、プラトン（『饗宴』）以来の西洋の思想伝統において、合一体の形成、すなわち「一つになる」こととして語られてきた。それも、恋愛についてだけではなく、友情や、場合によっては花や馬、名誉、神への愛までもがそうなのである。ここでは、モンテーニュとデカルトの言葉を引いておこう。まずは、モンテーニュが親友ラ・ボエシの思い出について語った言葉から。

私の言う友情においては、二人の心は混然と溶け合って、縫目もわからないほどである。[...] 一つのある特別な考えでもなく、二つでも、三つでも、四つでも、千の考えでもなく、そのすべてをまぜ合わせたものの精髄みたいなものが私の意志全体をとらえ、それを引っ張って行って彼の意志の中に飛び込ませ、没入させたのである。私は本当に、没入させた、と言いたい。なぜなら、われわれはそこにわれわれ固有のものを、彼のも、私のも、何も残さないからである¹⁷。

次いで、デカルトによる愛の定義。

愛とは [...]、魂を促して、自らに適合していると見える対象に自らの意志で結合させようとする、魂の情動である。[...] この同意 [= 意志] において私たちは、愛している対象と自分とがそれぞれ部分をなす一つの全体を思い描いている。[...] なおまた、人の愛しうる種々ちがった対象と、同じ数だけの愛の種類を分かつことも必要ではない。なぜなら、[...] [名誉、金銭、酒、友人、愛する人、子供など] に対してもつ情念は、互いに非常にちがってはいるが、しかし、それらが愛を分有しているという点では相似しているのである¹⁸。

モンテーニュやデカルトを解釈することは、それはそれで興味深いのだが、大量の準備作業が必要なことでもあるので、いまはやめておく。だが、彼らの所説を脇に置くとしても、現代にも、合一体の形成（への欲求）に愛の本質を見る論者は一定数いる。そして、ときに「合一説 (union view)」(Helm 2017, §2) と総称されるそうした考えを採用したとき、本稿の問

¹⁶ 重要な研究とは Velleman (1999) と Kolodny (2003), Frankfurt (2004) であり、伊集院 (2018, pp. 12-15) に簡便な解説がある。入門的なものに de Sousa (2015) と Brogaard (2015); Helm (2017) があり、ハンドブックとして Grau & Smuts (2017) と Martin (2019) がある。

¹⁷ モンテーニュ『エッセー』第1巻・第28章「友情について」(1588/1966), 邦訳 pp. 139-140。

¹⁸ デカルト『情念論』第79項, 第80項, 第82項 (1649/1974), 邦訳 pp. 153-155。

い——相互的な愛は何か特別なのか——に対して自然に浮かぶ答えは、「合一体になったがゆえに、合一体であることの特別なよさが生じる」というものであろう。そこで、本節では、この路線の答えをひととおり検討してみよう。

合一説は、長い伝統をもつうえ、その伝統を踏まえたさまざまな言い回しが流通していることもあり、細かいことを考えなければ直観的に分かりやすい。ただし問題は、細かいことを考え出すとよく分からなくなることである。そもそも合一体とは、ないし、合一するとは、具体的にはどのようなことなのだろうか。

最も単純でつまらない答えは「性行為」である。つまらないことは大きな瑕疵ではないが、本稿で私が設定している範囲——恋愛、親子愛、友愛——から言っ、て、答えとして不十分なことは明らかだろう。

他の候補としては、価値観の一致や、関心、欲求、意見、利害の一致など、さまざまありうる (cf. Helm 2017, §2)。ただし、例えば「意見が一致している」と言ってみたとこ、それだけではまだ規定が緩すぎる。何についての意見がどの程度まで一致することをもって「合一」と呼ぶのかを定めないうぎり、説明として十分とは言えないだろう。いま、

アニー：「私はアルビーしか愛してないわ」

アルビー：「僕もだよ」

という会話があるでしょう。ここで、アルビーの意見が「僕もアルビーしか愛していない」であれば、確かに、意見が一致していると言うことはでき、その意味では合一が生じている。だがもちろん、相互的な愛は生じていない。アルビーはアルビーしか愛していないからである。

そして、規定が不十分であるというこの点は措くとしても、私の見るところ、価値観や関心などの一致に愛の本質を見出し、相互的な愛の特別さを説明しようとする試みは、二つの欠点をもっている。

一つには、先に挙げたようなものの一一致は、そもそも愛が成り立つための必要条件ではなく¹⁹、愛が相互的になるためにも必要条件ではないという点である。言い換えれば、一方向的な愛にとっても、相互的な愛にとっても、価値観や意見などの一致は不要なのである。

例えば、実の親子の場合、世代が異なり、生育環境も異なるので、価値観も、関心も、欲求、意見、利害も、何も一致していないことは十分にありうる。一緒に暮らしていなければ、現在の境遇もまた異なるかも

しれない。しかしそのことは、お互いがお互いの幸福を喜び合うことを妨げないだろう。また例えば、幼馴染の二人が、成長するにつれて、まったく異なる価値観や関心をもつようになるというのも、よくあることである。そしてこのこともやはり、お互いがお互いを気にかけることをいささかも妨げないだろう。

そのようなわけで、価値観や意見などが一致することは、愛が相互的になることにとって必要ではない。それゆえ、合一説は、相互的な愛なら必ず備えている特別さを説明することができていないのである。

いまの反論はあまりフェアではないように見えるかもしれない。愛を抱くうえで、何かの一致を見出すことは不必要だ、と前提したところから私は議論を始めており、そう前提するのであれば、相互的な愛にも不必要だという結論が出てくるのはほとんど当たり前のこと、いわば論点先取のようなものではないか、と。

ただし私の見るところ、何らかのものの一一致が相互的な愛にとって必要だということを仮に認めたとしても、合一説では、本稿が扱う問いに関しては、問題を先送りすることしかできない。それが二つめの欠点である。

いま、関心や欲求などの一致が、愛が相互的になるための必要条件であると仮定しよう。しかしこれだけでは、相互的な愛の特別さの説明としては一歩も前進していない。関心や欲求が一致することが、なぜ特別な価値をもつのか、ということが、説明されていないままだからである。例えば、「愛が相互的になることはなぜ特別な価値をもつのか」という問いに、「関心が一致するからだ」と答えたでしょう。しかし、「関心が一致することはなぜ特別な価値をもつのか」ということが説明されないかぎり、これは、文言が置き換えられただけのことである。もともとの文言によって指示されていた事態が特別な価値をもつことは、まったく説明できていないのである。

念のために付け加えておけば、合一説はそもそも私の問いに答えるための説ではないのだから、これは、合一説そのものへの批判としては、ないものねだりに過ぎないかもしれない。だが、相互的な愛が特別な価値をもつことを、愛に関する一つの事実として認めるのであれば、その事実の説明は、愛についての哲学的理論にとって、答えられたほうがよい課題の一つではあるだろう。

5. 反響説の提示

それでは、愛している相手から愛されることのもつ特別な価値は、いったいいかなるものであり、何に由来しているのだろうか。私が提案するのは、第二節での愛の定義から導かれる、次の説明である。

私の提示した定義から、定義項の後半だけを取り除いた残りは、こうなる。

¹⁹ 十分条件ではないことは明らかだろう。価値観や趣味が一致する程度のことでは、相手を大切に思う気持ちは生じない。仲間が増えて嬉しいということはあるかもしれないが、それだけだと、相手に道具的価値を認めているにすぎない。仲間が増えるという目的が達成されさえすれば、他の人でもよいからである。

愛するとは、所愛者によいことが起きたと思ったときに、正の感情価（快）を伴う情動を抱くことである。

このままでもよいのだが、さらに分かりやすくするため、第二節で提案したキャッチフレーズを用いて、次のように言い換えておこう。

愛するとは、相手の幸福によって幸福になることである。

いま、マイケルとケイが相互に愛を抱いているとしよう。このとき、マイケルが幸福になると、その様子を見てケイは幸福になる。そのように幸福になったケイを見て、今度はマイケルが幸福になる。そのように幸福になったマイケルを見て、今度はケイが幸福になる……。これが、相互的な愛において生じることである。「相手の幸福によって幸福になる」という、愛しているという状態がもつ性質ゆえに、相互的な愛は、参加者の幸福を反響させ、増幅させうるのだ²⁰。

ここにあるのは、「マイケルはケイによって、そしてケイはマイケルによって幸福になる」という、たんなる双方向性ではない。ここにあるのは、マイケルはケイによって幸福になり、そして、「マイケルがケイによって幸福になった」というまさにそのことによってケイは幸福になり、そしてさらに、「〈マイケルがケイによって幸福になった〉というまさにそのことによってケイが幸福になった」というまさにそのことによってマイケルは幸福になり……という、ある種の再帰的なループ構造である。そして、私の考えでは、こうしたループが生じうるということこそが、愛が相互的になることの特別な価値（の一つ）である。やや単純化したうえで、少しでも分かりやすいように言い直すと、こうなる。自分の幸福をまさにその相手が喜んでくれるのが嬉しいということ、また、相手の幸福をまさに自分が喜んでいてということ、相手が嬉しく思ってくれている、そのことが嬉しいということ。この二つが生じうるということが、相互的な愛のもつ特別な価値（の一つ）なのである²¹。

こうした、いわば反響現象の、いちばん単純なケースは、いま描写したものの、すなわち、自分に嬉しいことがあったとき、それ自体が嬉しいだけでなく、それ

で相手が喜んでくれることも嬉しい、というものであろう。他にも、相手のために思って何かをして、それによって相手を幸福にすることができ、さらにそれによって自分が幸福になるというケースもある。後者のケースでは、幸福のループの発生にあたって、前者におけるよりも参加者の能動性が高まっており、そのことによって参加者の喜びはいっそう高められるかもしれない。このループの発生における参加者の能動的な関与にはさまざまな度合いがありうるし、おそらくはその度合いの違いに応じて、形成されるループも異なる姿を見せるであろう。

また、参加者の能動性だけでなく、知識内容にも、当然ながら、さまざまな違いがありうる。つまり、ごく大雑把に分ければ、愛が相互的であることを当事者たちが知らない場合と、愛が相互的であることを片方の当事者だけが知っている場合と、愛が相互的であることを両者とも知っている場合とがありうる（「知っている」だけでなく、「そうかもしれないと思っている」なども入れれば、他にもさまざまな場合を想定できよう）。そして、知識状態のこうした違いは、ループのありかたに、多様な形式と、ほとんど無限のニュアンスとを与えるであろう。

だがもちろん、そうした細部をここで描き切ることができない。本稿では、ごく一般的な図式を提示したことで満足するほかない。

6. 補足説明

反響説の提示する「反響によるループ構造の発生」は、ある種の合一と見做すことができるので、反響説も結局は合一説の一種なのではないか、と思われるかもしれない。確かに、そうした分類は可能であろう。そのことを否定するつもりは私にはない。ただし、重要なのは、何の、どのような合一なのかということである。そこさえ押さえられていれば、合一説に数え入れられても私は構わない。

さて、反響説の利点は、相互的な愛の価値を、愛の定義からほとんど形式的に導くことができるという単純さをもっていることである。ただしこの点は、別の側面から見れば、欠点である。

欠点の一つは、この説明があまりに形式的、あえて

²⁰ この反響においては快の量の増大だけが生じると考えるのが、最も単純かつ明快である。その場合、「快は反響し、総和を増やしつつ減衰していく」ということになるだろう。だが、反響においては、この現象に特有の、別種の快が生じている可能性もある。この場合、「反響に特有の快が、反響によって維持されつづけるのであり、量が増える必要は特にない」という可能性が開ける。私自身は後者の意見に傾いているが、残念ながら、いまそのことを示す準備はない。

²¹ ノージックの次の文章（Nozick, 1989, p. 74）は、本稿と類似した考えの表現と見做すことができる（訳は村山による。邦訳の対応箇所はp. 117）。「私たちは、相手が私たちと一緒にいて幸せであり、私たちの愛によって幸せになっているのを見ることで、自分であることをますます幸せと感じる。」ただし、愛についてのノージックの考え自体は、合一説を断片的に展開しただけにとどまっており、上掲の引用文についてもこれ以上の詳しい説明はない。おそらく、本稿の議論に似ているのはNagel（1989）所収の論文「性的倒錯」である。そこでネーゲルは、性的興奮は一般に「再帰的な相互認知」を含むという観点から、性的倒錯という現象を分析している。

言えば技巧的であり、そのせいで、人によっては、直感的な説得力に乏しいと感じるだろうということである。「私にとっては、相互的な愛の特別さはそのようなものではない」とか、「私は、好きな人の特別な存在になりたいと思っているとき、そのような反響現象のことはまったく考えていないし、そのようなものを求めてもいない」という人は、当然いるであろう。反響現象の存在を認めたとしても、「せいぜい一往復で減衰し、ループの形成には至らないのではないか」と考えることも、一定の直感的説得力をもっている（この論点については注20も参照されたい）。

この反論にはもっともなところがある。私の提唱する説明が、誰に対しても直感的な説得力をもつとまで主張するつもりは私にはない。他方で、私たちは、自分の心で何が起きているのかをよく知らない——とりわけ、ある心的状態がどのようなプロセスを経て生じているのかはほとんど知らないし、知ったところで意識できるわけでもない——ということも、心理学のさまざまな知見が私たちに教えるところである。

だから、この反論には、ひとまず次のように答えておくことにする。愛が相互的になったときに生み出される特別な嬉しさという、私たちに意識できている心的状態についての説明だからといって、その説明自体が直感的な説得力をもっている必要はない。私たちの自己認知は、それほどきめ細かくできてはいないのである。——もちろん、私たちの自己認知の性能をこのように低く見積もることは、私自身の立論にとっては両刃の剣である。この見積もりによって、いまの反論を退けられはするが、他方で、私の立論は、自己認知から汲み取ったさまざまな知見に依拠しているからである。このことは、哲学の方法論にとって極めて難しい論点を提示しているが、ここでは指摘にとどめざるをえない。

欠点に見えるかもしれないもう一つの点は、あまりに図式的だということである。言うまでもなく、実際の人間関係は、前節で描いた反響図式と比べて、遥かに豊かで複雑な細部と曲折をもつのである。これについては、論述の都合から言って仕方がないとは思いつつも、やはり認めざるをえない。そこで、本稿を締めくくるにあたって、本稿の図式性を補ういくつかの論点を挙げておきたい。

第一には、必ず伴う要素ではないとしてこれまで切り捨ててきたさまざまな要素や、いったん脇に除けた要素を、あらためて分析の俎上に乗せ、必要であれば要素間の相互関係を調べるという作業が、興味深いものとして残されていよう。価値を認めた相手から価値を認められること、かけがえのなさ、愛しさという情動、合一についてのもっと曖昧さの少ない規定、などなどである。とりわけ恋愛の場合、関係が継続することは、お互いが変化するなかで、お互いの価値を発見

し、価値観をすり合わせ、かけがえのなさ（代替不可能性）をいわば築き上げていくというプロセスを往々にして含んでいる。家族の愛や、友人への親愛の情にも、それぞれに固有のそうした性質があるだろう。現実においては、愛が相互的になることは、必ず伴うというわけではないそうした要素によって、多種多様な価値をもつのである。この問題を考えるには、別離のつらさというトピックが、手掛かりとしても、説明されるべき事柄としても、とりわけ重要であろう。しかしいまは言及するにとどめざるをえない。

第二に、愛が相互的であることに必ず伴う特別な価値が、本稿の提示したもので尽きているかどうかは、問いとしては開いたままである。本稿はとりわけ情動という側面に着目してきたが、愛にはそれ以外の側面もあるからである。例えば、恋愛に限らず、家族への愛であれ、友人への親愛の情であれ、愛は、往々にして、未来まで含めた人生の全体を統括する目的（の一つ）を能愛者に与える²²。愛が相互的になることは、その目的が、相手の存在や相手からの愛を前提したものになる——いわば、私の人生の意味が、特定の相手の存在や、その相手から愛されつづけることを想定して構想される——こと、そしてここにおいてもやはり何かしらのループが形成されることを意味する。おそらくここにも、相互的な愛がもつ特別な価値の一つの源泉を見出すことができるはずである。ここでもやはり、別離というトピックが重要になることは想像に難くないが、やはりいまは示唆しておくことしかできない。

最後に、反響効果の及ぶ先は幸福（喜び）だけにとどまるのか、という問題を指摘しておきたい。第五節で反響説を提示するとき、定義項から、負の感情価を伴う情動（悲しみや怒りなど）に関する箇所は取り除いた。しかし、愛することが、「相手の幸福によって幸福になる」だけでなく、「相手の不幸によって不幸になる」ことでもあるならば、不幸についても、反響効果が生じておかしくない。俗に、「共有することで、喜びは二倍になり、悲しみは半分になる」などと言われることがあるが、この俚諺のほうが正しいのだろうか、それとも、悲しみについても反響効果が生じるのだろうか²³。相互的な愛のよさとは異なり、こちらの論点については、広く認められる意見があるようには見えないため、この問題の解決にはまた格別の困難が伴うであろう。

²² Cf. Frankfurt (1998, pp. 80-94); Frankfurt (1999, pp. 82-94); Frankfurt (2004, pp. 51-55).

²³ この論点については注20を参照されたい。反響は量の増大ではなく質の変化をもたらすと考えれば、反響が、快については増幅（と感じられるもの）を引き起こし、不快については減少（と感じられるもの）を引き起こす、ということに、統一的な説明が可能になるかもしれない。

引用文献

- Barrett, L. F. (2017). *How emotions are made: The secret life of the brain*. Boston: Houghton Mifflin Harcourt.
(バレット, L. F. 高橋 洋 (訳) (2019). 情動はこうしてつくられる——脳の隠れた働きと構成主義的情動理論—— 紀伊國屋書店)
- Brogaard, B. (2015). *On romantic love: Simple truths about a complex emotion*. New York: Oxford University Press.
- Danziger, K. (1997). *Naming the mind: How psychology found its language*. London: Sage Publications.
(ダンジガー, K. 河野 哲也 (監訳) (2005). 心を名づけること——心理学の社会的構成 (上) (下)—— 勁草書房)
- Deonna, J., & Teroni, F. (2012). *The emotions: A philosophical introduction*. Abingdon: Routledge.
- Descartes, R. (1649). *Les Passions de l'âme*. Paris: Librairie Philosophique J. Vrin.
(デカルト, R. 野田 又夫 (訳) (1974). 方法序説・情念論 中央公論社)
- de Sousa, R. (2015). *Love: A very short introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 遠藤 利彦 (2013). 「情の理」論——情動の合理性をめぐる心理学的考究—— 東京大学出版会
- Frankfurt, H. (1998). *The importance of what we care about*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frankfurt, H. (1999). *Necessity, volition, and love*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frankfurt, H. (2004). *The reasons of love*. Princeton: Princeton University Press.
- Grau, C., & Smuts, A. (Eds.) (2017). *The Oxford handbook of philosophy of love*. Oxford: Oxford University Press. doi: .
- Helm, B. (2017). Love (Fall 2017 Edition). In E. N. Zalta (Ed.), *The Stanford encyclopedia of philosophy*. Retrieved from <https://plato.stanford.edu/archives/fall2017/entries/love/> (September 15, 2020)
- 伊集院 利明 (2018). 愛の哲学的構成 晃洋書房
- Kolodny, N. (2003). Love as valuing a relationship. *Philosophical Review*, 112, 135-189.
- Martin, A. M. (Ed.) (2019). *The Routledge handbook of love in philosophy*. Abingdon: Routledge.
- Montaigne, M. de. (2004). *Les essais*. Paris: Presses Universitaires de France.
(モンテーニュ, M. de. 原 二郎 (訳) (1966). 世界古典文学全集37 モンテーニュI 筑摩書房)
- Nagel, T. (1979). *The mortal questions*. Cambridge: Cambridge University Press.
(ネーゲル, T. 永井 均 (訳) (1989). コウモリであるとはどのようなことか 勁草書房)
- Nozick, R. (1989). *The examined life*. New York: Simon & Schuster Paperbacks.
(ノージック, R. 井上 章子 (訳) (1993). 生のなかの螺旋——自己と人生のダイアローグ—— 青土社)
- 大平 英樹・木村 健太・白井 真理子・藤原 健 (2017). 座談会: 「感情の心理学的構成主義に見るこれからの感情研究」 エモーション・スタディーズ, 3, 38-51.
- Pismenny, A., & Prinz, J. (2017) Is love an emotion? In C. Grau, & A. Smuts (Eds.) *The Oxford handbook of philosophy of love*. Advance online publication. doi: 10.1093/oxfordhb/9780199395729.013.10. Oxford: The Oxford University Press.
- Velleman, J. D. (1999). Love as a moral emotion. *Ethics*, 109, 338-374.
- 八重樫 徹 (2016). 価値に触れて価値を知る: フッサルと情動の知覚説 フッサル研究, 13, 104-117.

参考文献

- Lafollette, H. (1996). *Personal relationships: Love, identity, and morality*. Oxford: Blackwell Publishers.
- 大畑 浩史 (2020). Berit Brogaard, On Romantic Love: Simple Truths About a Complex Emotion (Oxford University Press, 2015). Tokyo Academic Review of Books. Retrieved from <https://tarb.yamanami.tokyo/2020/07/0003-berit-brogaard-on-romantic-love.html> (September 15, 2020)
- Smuts, A. (2014). The normative reasons of love, part I & II. *Philosophy Compass*, 9, 507-526.
- Sternberg, R. J., & Weis, K. (Eds.) (2006). *The new psychology of love*. London: Yale University Press.
(スタンバーグ, R. J. & ヴァイス, K. 和田 実 (訳) 増田 匡裕 (訳) (2009) 愛の心理学 北大路書房)